

[論文]

## 金魚の歴史における記憶遺産に関する研究 ～金魚を最初に記録した資料、図について～

### A Study on Memory Heritage in the History of Goldfish ～About the first records and drawings of goldfish～

太田和 良 幸

OHTAWA Yoshiyuki

#### Summary

The origin of the goldfish is the red crucian carp (Hibuna) due to a mutation inhabiting the Yangtze River basin in China. In other words, goldfish are artificially bred from Hibuna, a mutant species of crucian carp. With the spread of Buddhism, Release Ponds were built in the temples, and the Hibuna was released and raised in this pond in isolation from the natural environment, which is said to be the origin of the establishment of goldfish.

Hibuna, which was placed in a pond or container such as jars, bowls, and grew in a state different from its natural environment, became conspicuous for its mutations, and as humans skillfully preserved the peculiar mutations of the fish, the morphology of the fish had changed, such as the tail fin opening to the side, and the colors had become diverse. These rare goldfish were apparently a tribute to the emperor and were recognized only in the center of power. In the Song Dynasty, the emperor himself raised goldfish, which spread to his subordinates, and goldfish breeding boomed among the powerful of the time.

Therefore, the mention of goldfish in official sources (e.g. Encyclopedia of Materia Medica, breeding books) was much later than the actual state of goldfish. In other words, it is thought that the fish that can be seen in the paintings of the emperor's painters rather than in books released to the general public were the most advanced goldfish of the time. For this reason, I believe that emperor's painter Liu Cai's "Fish Swimming amid Falling Flowers" is of high value as a picture of the "domestic-fished" Hibuna, that is, the earliest fish in the history of goldfish.

キーワード：ヒブナ 金魚 きんぎょ 金魚の歴史 記憶遺産 家魚 本草綱目 三才図絵  
落花游魚図 劉宋

Keyword : Hibuna, red crucian carp, goldfish, history of goldfish, Memory Heritage, domesticfish, Compendium of Materia Medica, Fish Swimming amid Falling Flowers, Liu Cai,

## はじめに

金魚の歴史を調べていると、これまでの通説を覆すような新たな事実を発見することがある。金魚の研究者間では、中国明代の「本草綱目」や「三才図絵」は、既に古い資料として知られている。しかし、本稿で紹介する劉棻の「落花游魚図」は、これまで美術界では既知であったものの、金魚の研究者間では知られていなかった。この中国宋代の「落花游魚図」は、「家魚化」されたヒブナを描いた絵図として特筆すべきものである。

UNESCO（国際連合教育科学文化機関）では、「世界の記憶」として、人類史において特に重要な記録物を国際的に登録する制度があるが、金魚の歴史においても重要な記録物が存在するので、今回、金魚の形成過程とこれらの資料の関係を整理することにした。本稿において、これらの記憶遺産の存在や重要性の認識を高めることができれば幸いである。

## 1. 金魚の形成過程

### 1-1. 金魚の起源としてのヒブナ

金魚はもともと中国において品種改良され、飼育されていたものであり、現在でも中国において多数生産されているが、現在の金魚の種類（品種）は多く、東南アジアにおいても養殖が盛んになり、ガラス水槽の普及による横見での鑑賞方法など、鑑賞方法の変化もこれあり、品種の多様化が進んでいる。しかし、

元々金魚は中国原産の鑑賞魚であり、日本には室町時代ごろ日中貿易に伴い移入されたとされている。

金魚の起源は、中国の揚子江流域に産するフナの色が突然変異で赤く変わった魚である。つまり、フナの突然変異種であるヒブナを人工的に品種改良したものである。この赤い色をしたフナ（ヒブナ、緋鯛）は、コイ科フナ属の魚で、突然変異によって黒い色素が失われ、赤色（オレンジ色）の身体を持つ。もちろんフナもアルビノが存在するが、ヒブナはメラニン色素が欠損しているアルビノとは違い、黒色色素胞を欠く変異種である。

既に21世紀初めには、東海大と国立遺伝学研究所の共同研究チームが遺伝子の解析結果<sup>1</sup>によって、金魚は中国産のフナの一つが祖先で、5つのグループに分かれて多様な品種が作られたことを解明している。また、大阪大学蛋白質研究所の教授などのグループが行った金魚のゲノム解析結果<sup>2</sup>からは、金魚の祖先のフナは1400万年前に全ゲノム重複が起こり、通常の遺伝子が2倍になっていることが分かった。金魚の品種が多様なのは、この4倍体の遺伝子が原因になっていることが考えられる。

### 1-2. 金魚の始まり

金魚がいつから存在するのかについては、金魚の定義に左右される。ヒブナは自然に存在するものなので、これを金魚ということはできない。金魚の定義を「ヒブナを人間が自然の環境から隔離し、人工的な環境で飼育し、これを繁殖させたもの」と定義するとすれば、見た目はヒブナでも金魚の原型として位置づけられる魚も存在しうるだろう。

自然環境下では、ヒブナ同士が繁殖して子孫をヒブナとして遺伝子を継続させることは難しい。しかし、人間がヒブナを自然の状態から複数集めてきて、人工的な環境下で一緒に飼育すれば、繁殖により遺伝子を継続することができる。こうして、ヒブナがヒブナの子を産んで、赤い色を保存できるようになったと思われる。

### 1-3. ヒブナの「家魚化」

野生のヒブナが金魚に代わっていく過程は、諸説考えられるが、もっとも有名な陳楨（1954）と王春元（1994）の論文の内容を元にして考えると、表1のように整理できる。

野生に生息していたヒブナ（突然変異で橙色に変化したフナ）は、その珍しさ、水中に見える神々しさに人々が魅かれて、捕獲されるようになり、自然とは違う環境で飼育されるようになった。フナは淡水魚で、食用にもなるので、コイやレンギョなどと一緒に中国の古代から養殖されてきた歴史もあると思われるが、養殖魚の中からヒブナが出現したという歴史的記録は存在しない。

仏教の普及に伴い、寺院に放生池が造られ、この池に捕まえられたヒブナが放たれ、自然環境と隔離された状態で飼育されたのが金魚成立の原点だといわれている。これが半「家魚化」の時期である。中国の唐の時代から始まったと言われている。めったに見つからない野生のヒブナを捕まえるのは相当難しかっただろう。さらに、複数を確保するには、相当な時間がかかったと想像される。

ヒブナ同士で繁殖ができなければ金魚は造りえない。複数のヒブナが同じ池の中で繁殖

してこそその子孫はヒブナでありつづけることができる。こうして繁殖されたヒブナは、放生池での飼育から庭の池での飼育に移されることになったと思われる。

既述の通り、金魚の原種であるヒブナは太古から自然界に存在していたはずである。人間がこれを捕まえて自然の環境から人間の都合のいい環境に移し、そこで飼育することもきつとあったであろう。しかし、この時期は野生のヒブナの時期と言える。こうした野生のヒブナの時期の捕獲は個人的・偶発的に行われたと思われる。おそらく、意識的にヒブナを捕獲して人工的な環境で飼育し始めるのは、仏教の教えが広まり、放生池が造られてからと思われる。中国の宋代以前は、単に放生池に放し飼いにされていたのだろう。この状態の飼育時期を王春元は、金魚の半「家魚化」の時期と呼んでいる。

多くの人が意図的に特殊な環境で組織的にヒブナの飼育を始めたのは、中国の宋の時代からと言われている。この状態の飼育時期を王春元は、金魚の「家魚化」の始まりの時期で、さらに「家の池での飼育時期」と呼んでいる。

ちなみに、「家魚」とは、家畜化された魚のことで、食用の魚を飼育することを指すことが多いが、鑑賞用に飼育する魚も「家魚」と言われている。中国では古く唐時代以前から鯉などの食用淡水魚の養殖が盛んであったと言われており、ヒブナの飼育も難しくなかったと推察される。いずれにしても、ヒブナの「家魚化」によりヒブナの生態が変わり、突然変異が人間の目につきやすくなり、突然変異が意図的に保存され、金魚が形成されたと考えられる。

表1 金魚形成の歴史

時 期		年 代	出現した新品種
野生の時期		古代、晋朝～随朝 (265～618年)	(川や湖の中にヒブナを発見の記録あり)
半「家魚化」の時期 (放生池での飼育時期)		唐朝～北宋末年 (619～1126年)	
「家魚化」 の時期	家の池での飼育時期	南宋 (1127～1279年)	白色、赤斑
	池～水槽（甕や盥）飼育の 過渡期	南宋～明朝 (1280～1546年)	
	水槽（甕や盥）飼育時期	明朝～清朝 (1547～1847年)	三色、双尾、長鰭、出目、 短身
	意識的選別の時期	清朝～中華民国 (1848～1925年)	黒出目、獅子頭、鵞頭、鼻 房、茶金、青文魚、翻鰓、 珍珠鱗、朝天眼、水泡眼
	交雑育種の時期	1925年～現在	数えきれないほどの多くの 品種

(出典) 王春元「中国金魚」(1994) 表3-1「金魚的家養史」等を元にして著者が作成

宋の時代には、仏教の教えの普及に伴い皇帝をはじめ多くの家来が仏教に皈依するとともに自らの住まいの敷地の中に放生池を作り、そこに魚を放して自然と違う環境で魚を飼育するようになった。この時に赤色をしたヒブナが放生池の中で重宝され、人がこれにえさを与えることによりヒブナは太り、また突然変異が人間にとって目に付きやすい環境になったため、ヒブナが金魚に変化して行ったと言われている。

特に徽宗皇帝（在位期間：1100年～1126年）は、熱心に仏教に皈依し自らの住まいの敷地の中に放生池を作りそこに魚を放して飼育していたと言われている。また皇帝の部下達もその影響を受け敷地内に放生池を作って魚を飼っていたらしい。こうしたことから多くの魚が自然の生息環境から人間が作った人工的な環境に移され、人工的に飼育されることになった。そこにヒブナが容れられた。こ

れがヒブナの「家魚化」である。

中国の宋の時代、当初は首都が中国国内では比較的北方の開封にあったが、北方の異民族からの圧力により朝廷は南方に逃れ、比較的温暖な杭州の地に都を置いた。この地は、揚子江を中心として川や湖が多くあり、コイやフナがたくさん生息する地域であり、おそらくヒブナも比較的容易に見つかり、温暖で飼育しやすかったと思われる。

## 2. 金魚の歴史における記憶遺産

### 2-1. ヒブナらしき赤い色の魚の存在を始めて明らかにした資料

金魚の原型としてのヒブナは、歴史上、コイ科フナ属のフナが出現して以来、幾度となく突然変異で色変わりして、この世に出現していたものと思われるが、人間に特



別に認識されるまでは時間がかかったであろう。

ヒブナらしき赤い色の魚の存在を始めて明らかにした資料（書物）は、金魚の原産国である中国の文献である。中国及び日本の金魚研究者の中では、後述する『本草綱目』（中国明代の百科全書の本草書、1596年出版）鱗部第四十四卷鱗之三において、中国南北朝時代の「述異記」の中に「晋桓冲遊廬山見湖中有赤鱗魚（晋の桓冲が廬山に遊び、湖の中に赤い鱗の魚を見た）」と書いてあるものをもって、現存する資料の中で最も古い赤い色の魚の記録だとしている。

なお、晋（265－420年）の桓冲が見た赤い色の魚がフナの色変わりした個体（ヒブナ）だったかどうかは知るべくもない。自然界では、太古より多くの突然変異が起きていて、多くの種類の魚の色が赤くなることは容易に推察できる。現代でも、ヒメダカ（オレンジ色のメダカ）、ヒドジョウ（オレンジ色のドジョウ）などは色変わりした珍しい個体として知られている。ただ、後世、この記述をもって、金魚の歴史が語られているのも事実である。

## 2-2. 出版物から見る金魚

日本と中国における金魚関係の出版物を調べてみると、中国では、金魚のことを本格的に記した出版物は、明代（1368年から1644年）から出現する。

中国明時代の百科事典である、李時珍（1518年－1593年）の著作になる「本草綱目」<sup>iii</sup> 四四卷鱗之三において、初めて金魚の存在が明らかにされている。「本草綱目」では、他の魚については挿絵があるものもある

が、金魚については挿絵はない。フナの色変わりした個体を金魚と呼ぶようになったのは、明代頃とされているので、それ以前には書物に現れることはなかったと言える。この「本草綱目」鱗部第四十四卷鱗之三の記述も金魚の歴史の中では記録遺産に該当するものであろう。

金魚の形を図にしたものとしては、本草綱目から100年後になって初めて現れる。金魚の生態と飼育方法について論じた中国で最初の単行本であると言われている「硃砂魚譜」<sup>iv</sup>（1596年初版出版）でも、金魚を表す図は存在しない。

筆者が調べた範囲では、一般的には、世界で最も古い金魚を表す図は、「三才図絵」の中の挿絵に出てくる図である（図2参照）。この「三才図絵」は、「天・地・人」の三才にある文物を、図入りで解説した中国明代の百科事典で、明の王圻と王思義が編纂し、1607年に完成し、1609年に出版されたものである。

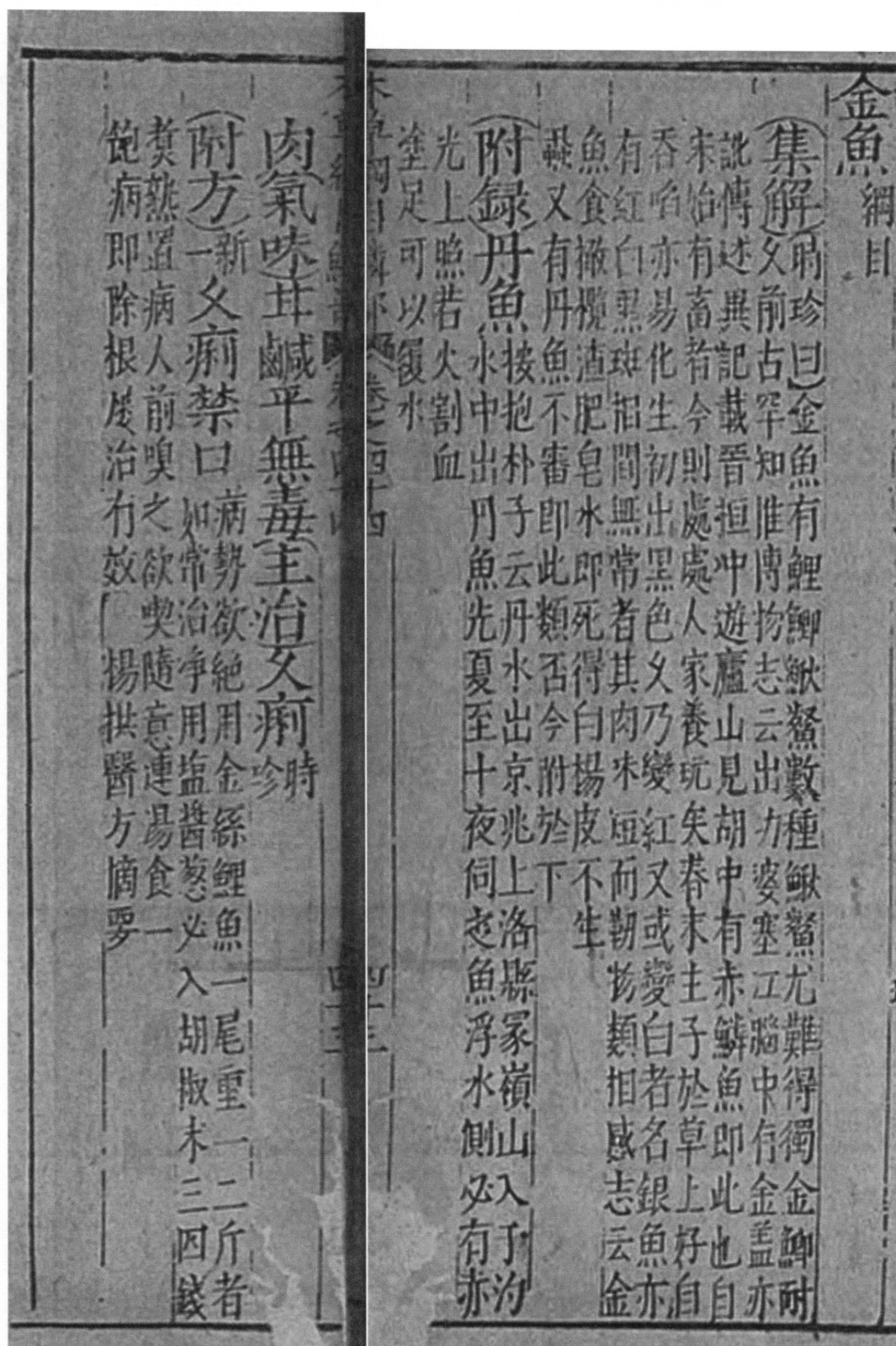


図1 「本草綱目」四四卷鱗之三 金魚

(出典) 国立国会図書館デジタルコレクション



図2 「三才図絵」鳥獸5巻 金魚

(出典) 国立国会図書館デジタルコレクション

### 2-3. 絵画にみる金魚

中国の絵画作品の中には古くから金魚らしき赤い色の魚が描かれているものがあり、これが赤いフナなのか、コイなのか、あるいはその他の魚なのか見分ける必要がある。筆者は、金魚が描かれている様々な絵画を調べてきたが、中国の北宋時代の劉寀作と言われる米国セントルイス美術館<sup>v</sup>所蔵になる「落花遊魚図」に着目した。

「落花遊魚図」には、水面に落ちた花びらに多くの魚が集まるさまが描かれているが、その魚の中に4匹の赤い魚（ヒブナ）が描かれている。当時の絵画は写実的なものしかなかったようなので、劉寀が描いたヒブナは、当時実在していた魚であろう。赤い色のフナが、当時存在していたことを示す貴重な資料である。

「落花遊魚図」に描かれているヒブナは、半「家魚化」されたものか、その子孫であろうと推察され、複数描かれていることもあり、「家魚化」されたヒブナ又は金魚の原型とも考えられる。よって、中国の金魚の歴史の中でこれまで語られてきた、図としての初出のものは、この「落花遊魚図」に描かれている魚が最も古いと言っても過言ではないだろう。

なお、その他の古い絵画でヒブナを描いたものがある可能性もある。しかし、彩色の図であれば、赤い色のフナかどうかは判別できるが、彩色されていない水墨画で描いたとしたら、それが金魚の原型（ヒブナ）なのか普通のフナなのかは解説がないとわからない。

### 3. 劉寀「落花游魚図」について

劉寀は、生没年不詳だが、中国の北宋の時

代に活躍した画家である。劉寀は、魚の絵を描くのが得意だったと言われている。中国の辺安（現在の河南省開封市）の出身で、第6代皇帝神宗朝（1067年～1085年）で宮廷の役人<sup>vi</sup>を務めた人だと言われている。劉寀は、北宋時代の神宗朝から徽宗朝（1100年～1126年）の画魚の名家とされているが、台湾にある国立故宫博物院によると、字は宏道または道源であり、11世紀頃に活動していたとのことである。「劉寀の描く魚は動きが自然で、水中をのびのびと泳ぎ回っている。後に画魚と水の表現では劉寀が至高とされるようになった。」とされている<sup>vii</sup>。

一般的に当時の中国画は事実を描写したものとされているので、「落花游魚図」によって現実に赤い色をしたフナが存在していたものと思われる。ただ、この絵のようにある場所に複数の赤いフナがいたかどうかは分からない。劉寀が一匹の魚をいろいろな角度から同じ絵の中に描いた可能性もある。いずれにしても、この赤い魚は、当時実在していた魚であろう。その魚は、コイでもなければ、ハヤでもなく、フナである。赤い色のフナが、当時存在していたことを示す貴重な資料である。

劉寀の活躍していた時期は、1-3. ヒブナの「家魚化」で記した通り、半「家魚化」から「家魚化」の過渡期であり、寺院の放生池又は皇帝をはじめ多くの権力者の住まいの敷地内の池の中で、ヒブナなどの魚が飼育されていたと言われているので、劉寀はこの様子を見て「落花遊魚図」を描いたとも考えられる。

「落花游魚図」は、図3、4、5のように30×295cmとかなり横に長い絵図だが、その

中には4匹の赤いフナ（ヒブナ）が描かれていて、この当時に（半）「家魚化」されたヒブナが存在していたことを示している。この絵図は、自然の中に多数の魚が活き活きと泳いでいるさまを描いているとされているが、描かれた当時に、自然の河川や湖沼中にヒブナが接近して複数存在していることはまずありえず、同じ魚を複数のアングルで描いたものでなければ、おそらく人工の池の中の様子を描いたものであろう。

以上のように、この図は、北宋期にすでに、赤く変色したフナ（ヒブナ）が存在し、なおかつ人工の環境で飼育されていたことを表す貴重な資料である。

なお、この「落花游魚図」は、現在中国国内にはなく、アメリカのセントルイス美術館に所蔵されていることもあり、中国の金魚研究家の目につきにくい環境に置かれている。

## 4. まとめ

金魚の成立に決定的な影響を与えたのは、宋の徽宗皇帝（在位期間：1100年～1126年）だと言われている。皇帝自らが金魚を飼育することで部下たちにも広がり、当時金魚の飼育がブームになった。時の権力者たちが好んで自宅で金魚を飼うようになり、その後池の飼育から甕や桶、盥、盆といった容器に入れての水槽飼育が主流になった。

金魚はその後の歴史の中で一般大衆の鑑賞・愛玩の対象となった。しかし、明朝以前は皇帝などの権力中枢部や裕福な階級の人々のいわゆる「文人趣味」として飼育されてきた。現代においては、貴重な品種の金魚は

「宮廷金魚」と言われることもある。宋朝以降は皇帝お抱えの金魚を飼育する専門家が存在していたと考えられ、宮廷内で珍しい品種の維持管理を実行していたはずである。筆者が北京に在住していた1990年ころでも、北京市内の天壇の東側にあった北京市花木公司の中に大きな金魚専用の飼育場があり、多数の貴重な品種が飼育されていた。この飼育場は清朝の皇帝のための金魚養魚場と言われていた。

昔に自然の水の中でヒブナそのものも見つけるのは難しく、それを捕まえるのはさらに困難であったと思われる。ヒブナの「家魚化」が進展し突然変異が目立つようになり、尾びれが横に開いた魚などはかなり貴重なものであったと思われる。これらの珍しい魚、金魚は、皇帝への献上物となっていたようで、権力の中心部でのみ認識されていたと思われる。

したがって、公の資料（本草学の事典や飼育書など）に金魚が登場するのは、実際よりかなり後のこととならざるをえない状況であったと推察される。つまり、一般向けの公開本より、皇帝のお抱え絵師が描いた絵画作品の中に見ることができる魚こそ当時の先端的金魚だったと考えられる。このことから、劉寀の描いた「落花游魚図」は、「家魚化」されたヒブナ、つまり金魚の歴史の中でもっとも早い段階の魚を表す絵図として、記憶遺産としての価値が高いものである。

文末脚注

- i Tomoyoshi Komiyama, Hiroyuki Kobayashi, Yoshio Tatenno, Hidetoshi Inoko, Takashi Gojobori, Kazuho Ikeo 「An evolutionary origin and selection process of goldfish」 Volume 430, Issues 1-2, Gene、2009
- ii Zelin Chen, Yoshihiro Omoriほか「De novo assembly of the goldfish (*Carassius auratus*) genome and the evolution of genes after whole-genome duplication」、Science Advances Vol.5, No.6、2019
- iii『本草綱目』は、中国の明代に、李時珍（1518－1593年）が著した本草書。1596年上梓された。
- iv 明代の張騫徳が書いた金魚の生態と餌付け方法について論じた中国で最初の単行本で、1596年に初版が出版された。
- v セントルイス美術館 (Saint Louis Art Museum) は、アメリカ合衆国ミズーリ州セントルイス市にある美術館である。
- vi 台湾にある国立故宮博物院の発行になる「書畫大觀園」での図評によれば、劉宋は生没年不詳であるが、北宋時代の6代皇帝神宗朝において文散官（中国の役人である官人の階級規定に定める特定の官品に相当する官名）の正六位上の朝奉郎まで上がった人だったとのことである。
- vii 2015年国立故宮博物院創立90周年書画特別展「年年有餘—画魚名品展」展示作品解説にて説明されている。

参考文献

- 1 松井佳一「科学と趣味から見た金魚の研究」、弘道閣、1935年
- 2 陳植「金魚家化史与品種形成因素」、1954年
- 3 王春元「中国金魚」金盾出版社、1994年
- 4 鈴木克美「金魚と日本人」三一書房、1997年
- 5 宮崎法子「落花游魚図—劉宋から憚寿平へ、そして椿椿山へ」実践女子大学美術史學36、2022年





図3 劉宋「落花游魚図」(部分)

(出典) セントルイス美術館デジタルアーカイブ



図4 劉宋「落花游魚図」(全図)

(出典) セントルイス美術館デジタルアーカイブ



図5 劉宋「落花游魚図」(全巻)

(出典) セントルイス美術館デジタルアーカイブ